

スマートキッズ発達支援研究所便り 「きらっと」22号 2021年10月1日

研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/labo/>



## 学習や生活に困難のある子どもへの ICT 支援

主席研究員 河村 久

文部科学省が「GIGA スクール構想」を打ち出し、小学校等の子ども達に一人1台のタブレット端末等を整備していく取り組みが進められています。文部科学省が令和3年7月末時点で実態調査を行った結果（速報値）によれば、全国の公立小学校等の96.1%、中学校等の96.5%が全学年または一部の学年で端末の利活用を開始しているということです（「等」には義務教育学校、中等教育学校前期課程、特別支援学校小学部、中学部を含む）。昨年来の新型コロナウイルスの感染拡大への対策として情報通信技術を活用した授業が促進されたという側面もあったものと思います。

将来の社会は、“Society 5.0”（サイバー空間とフィジカル（現実）空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会）の時代が到来すると構想されています。また、新型コロナウイルスの感染拡大など先行きが不透明な「予測困難な時代」でもあるといわれています。こうした将来の社会を担う子ども達には、このような社会において自立した個人として生きていくことのできる資質・能力を身につけることが求められているのです。その意味では、文部科学省が推進している「GIGA スクール構想」は、地球規模で変わっていく新たな社会の創り手を育成していくという戦略的な取り組みであるということができるでしょう。

新たな社会においても生き抜くことのできる子どもを育成するため、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を進めています。授業改善の視点は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」です。「個別最適な学び」とは、一人一人の子どもの特性や学習進度等に応じ指導方法や教材の工夫を行うなど指導の個別化を図るとともに、一人一人の興味・関心や学び方の特性に応じた学習の個性化を図ることです。一方「協働的な学び」を進めることは、「個別最適な学び」が孤立した学びにならないよう、子ども同士が協働しながらよりよい学びを生み出すということです。この両者を組み合わせることにより、一人一人の子どもの「主体的・対話的で深い学び」を実現していこうとしているわけです。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の推進は、全ての授業において様々な方法で行われるわけですが、パソコンやタブレットを活用した学習は、こうした学びを進める上で効果的なツールでもあります。

デジタル庁等の政府機関が7月に実施した GIGA スクール構想に関するアンケート調査では、子ども達（小・中・高）から次のような意見が寄せられているということです\*。

「タブレットの機能を使うことができるということで、生徒が困っている時に先生の指導が今よりさらに一人一人に届き、その単元に分からないことがなくせる、というところがタブレットを使うメリットであり、大切なことと考えています。」

「自分は教室に入れない不登校です。週に1時間だけ個別授業をしていますが、クラスメイトや先生と

やりとりは全然ありません。(中略) 自分みたいな生徒は(タブレットは) 学校でも使えないし、普通の授業で何をしているか全然分からない。もっとオンラインをうまく使って、自分みたいな生徒でも何かやりたかった。」

「他校とのコミュニケーションツールとして使用する。外国人の人とオンラインで話して、もっといろいろな国のことが知りたい。SDGs のことなど、世界の流れを知るために使えればいいと思う。」

これらの子ども達の声は、情報通信技術を多様な子どもの教育的ニーズに対応し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」に結びつけてもらいたいという切実な願いを表現したものと受け止めることができるように思います。特別支援教育における情報通信技術の活用も、まさに「個別の学習ニーズに対応し、一人一人の特性に応じた学習保障とそのための支援ツール」として、使いこなしていかなければならないものと考えます。

例えば、デジタル教科書は、本人にとって最も読みやすい文字の大きさにしたり、行間を読みやすく広げたり、分かち書きにして分節の区分を分かりやすくしたり、読み上げ機能を活用したりすることによって、文字の読みに難しさのあるLDの子どもの学習を格段にやりやすくすることが可能です。上肢に障害のある肢体不自由児には、これまでも様々な入力補助装置が開発されてきましたが、それらをより効果的に駆使することが期待されます。病気等のため入院中の病弱の子どもには、教室と病室とをオンラインで結んで、遠隔授業をリアルタイムで実施することも可能です。今後はさらに、VR(バーチャルリアリティ)やロボット等を導入し、これまで不可能と思われた学習教材を開発していくことも考えられます。

他方、先ほどあげた政府機関による子どもに対するアンケートでも「タブレットのみの授業だと頭にしっかり入ってこないという人も沢山いるので、紙とタブレットをきちんと併用して授業を進めること。紙には紙のいいところがあるし、タブレットにはタブレットのいいところがある。そのどちらも有効的に使うこと。無理にタブレットでしようとする必要はないと思う。」といった意見も寄せられています。情報通信機器の「光と影」にも十分留意し、「一人一人の子どもの教育的ニーズ」に応じた最も効果的な活用方法を研究していく必要がありましょう。

※ デジタル庁・総務省・文部科学省・経済産業省「GIGA スクール構想に関する教育関係者へのアンケートの結果及び今後の方向性について」令和3(2021)年9月3日

## 河村 久 (かわむら ひさし) 聖徳大学 教授

私は、現職に就く前には東京都の公立学校の教員、小学校長・幼稚園長として、主として障害のある子どもの教育に従事してきました。

この間、全国特別支援学級設置学校長協会会長(平成19年度)、中央教育審議会専門委員(平成18年度～平成23年度)等を歴任しました。近年は、特別支援学校の学校運営のお手伝いをするとともに、通常の学級に在籍する発達障害のある子どもの教育に関する研究や現職の先生方への支援にかかわることが多くなってきました。

本研究所の活動に参画することによって、生きにくさを感じている子どもたちの発達支援と生活の充実のためにお役に立つことができたら、大変幸せなことと思っています。

